

# 駒場友の会

## 会報 第二号



### 駒場キャンパスの発展と

### 駒場友の会

大学院総合文化研究科長

教養学部長

木畑 洋一

本年(二〇〇五年)二月一六日に、浅島誠教授のあとを受けて総合文化研究科長・教養学部長に就任した者として、駒場友の会の皆様に一言ご挨拶申し上げたいと存じます。

駒場友の会は、駒場キャンパスを愛する人々の集いとして一年前に発足しましたが、私も駒場を愛する者としては人後に落ちないつもりでおります。大学に入学してから、留学や在外研究で日本を離れていた通算三年余りの期間を除いて、私の生活は常に駒場と密接に結びついてきました。大学院生時代にキャンパスのすぐそばのアパートに二

年ほど住んでいたこともありましたが、他大に教員として籍を置いていた六年間も、非常勤講師として週一度は駒場を訪れておりました。その長い駒場とのつきあいの中で、春の桜や秋の銀杏に代表される駒場の豊かな自然や、エネルギーにあふれた学生たち、とりわけ一、二年の学生たちがかもし出す駒場の若々しい雰囲気は、私にとつてこの上なく大切なものとなってきました。

駒場の自然やこうした雰囲気は、今も全く変わっておりませんが、キャンパスの建物の具体的様相には、ここ数年の間で大きな変化が生まれてきています。廃寮に伴う駒場寮の取り壊し、新図書館棟の建設、時計台の後ろにそびえたつ形となった総合研究棟の建設、そして駒場友の会の事務所が入っているファカルティハウスの誕生などです。あまり人目に付くところにはないので気づいている方は少ないかもしれませんが、男女共同参画支援施設という形で駒場保育所の建物が素敵な木造建築として作られたことも、忘れることはできません。また今後の話になりますが、これから数年かけて、学生たちが学ぶ教室棟の大幅な改修も行われることになっていますし、学生のための厚生施設環境の大幅な改善につながるコミュニケーション・プラザの建築ももうすぐ始まるうとしています。

このように変わらぬもの、変わったものをも含みつつ、豊かな教育・研究の場として息づいている駒場キャンパスが、これからますます発展していくためには、そこを愛する方々からの暖かい視線が注がれつづけることが、ぜひとも必要です。駒場友の会の会員の皆様方には、その点でのご協力を心からお願いたします。またすでに駒場友の会に参加された方以外にも、駒場キャンパスを、またそこの生活の思い出を、大切に思っている方々は、たくさんいらつしやるはずですよ。駒場友の会にそういった方々が一人でも多く参加して下さって、駒場キャンパスでの催しものなどをともに楽しんだりするなかで、駒場の発展を支えて下さることを、心から希望しております。

### 駒場友の会とともに

一 高同窓会理事長 若井 恒雄

昨年十一月一日の一高開學一三〇年記念大会の日をもって三重野前理事長以下の役員執行部が第一線を退き、私が理事長を仰せつかつてから四ヶ月、赤坂の一高同窓会事務所を閉鎖して駒場のファカルティハウス二階事務室で駒場友の会のルームメイトに

なつてから一ヶ月が経過しました。先日始めてファカルティハウス内のセミナー室で一高同窓会理事会を開催し、駒場に戻ってきたことを改めて実感しました。戻ってきたと言つても、私の場合は六十年ぶりの帰郷(校)ですが、昨日起きたことはよく忘れても六十年前のことは案外覚えていたものだと思ひました。

私の一高生活は第二次大戦中の昭和十八年の入學のため、本も食糧も衣類も何もかも甚だしく不足しており、その上戦時下とあつて學業が勤労働員で中断されることもしばしばでした。私も埼玉県農家で芋ほりをやつたり、日立製作所や三菱重工にかなり長期間の勤務をさせられたりした上、昭和二十年には繰り上げ卒業を余儀なくされたのであります。今の學生さんからみたら大変恵まれない學生生活に見えるかも知れません。しかしこの短いときはぎの一高生活、就中寮生活こそが、私の人生の中で最も貴重な青春の日々であり、私の魂の成長にとって大切な二年間であつたのであります。

六十年ぶりに駒場に戻つてきて時計台や正門の扉そして倫理講堂(現九〇〇番教室)や圖書館(現美術博物館)は昔のまゝでした。しかしかつてはそれほど大きいと思ひなかつたいちよう並木をはじめとする學内の樹々は亭々とした大木に成長し、又各所に

立派な建物が増え、多数(戦時中の私たちの頃の十倍以上の人数と聞きますから目立つのは当然ですが)の若い學生さん、男子だけでなく女子の學生さんたち(六十年前の一高の寮は明治二十三年の開寮以来続いてきた、記念祭の一日を除いて女人禁制でした。正確に言えば、寮の近くの摂生室、つまり診療室にDSSと渾名された看護婦さんが一人だけいました)が楽しげに學内を散策しているのはまさに時代の流れで、どちらが良いという問題ではありませんが、大変な驚きでした。特にシヨックを受けたのは、私たちが一高在学中そこで寝起きし友情を育んだ四つの寄宿寮がすべて取り壊され、旧南寮の跡には現代風の駒場図書館の建物が建ち、全く昔を偲ぶよすがが無くなつていくことでした。

しかしその駒場の地が現在東京大學に入學するすべての學生にとって學問研究の基礎を學び、教養を身につけるすぐれた場所であることは六十年前と変りはありません。一高の歴史と伝統そして一高同窓生の若き日の精進の跡がそこかしこに残されていることも又事実であります。

昨年から美術博物館で本郷から駒場につらなる一高の記念展を開催して頂き、一高同窓以外の方々が多数ご覧下さったことは私共一高同窓生にとって大変嬉しいニュースでした。

今後このような催しが適宜実施されると伺つておりますが、教養學部の諸先生や駒場友の会の皆様のご支援を得つつ、一高の歴史と伝統、そして一高同窓生の志の一端が後世に正しく伝えられるよう私共としても微力を尽くすつもりであります。

駒場友の会の今後のご発展をお祈りするとともに一高同窓会との緊密な連携を今までも同様維持して下さるよう心からお願ひ申し上げます。

## 駒場友の会入会にあつて

(財)東京高等学校同窓会理事長

相澤登

この度、駒場友の会事務局より、会報に寄稿する様にとの御依頼を頂きました。

そもそも、何故東高同窓会が駒場キャンパスに来ることになったのか、その由来と東高の歴史とその特色を簡単に御紹介したいと思います。

東京大学教養学部年表に依れば、戦後の学制改革により一九四九年五月、新制東京大学発足と共に教養学部が創設され、その際に旧制一高と東高が同時に東大に包摂されました。つまり、一高と東高が母胎となつて東大教養学部が設立されたと云う事でありませぬ。



これが東高と駒場を結ぶ最も重要なポイントであり、人的な結びつきとして二十名以上の東高教授が教養学部教授に転出されました。

教養学部創設以前にも、昭和二十年五月の東京大空襲で全てを失った東高は、終戦後の八月二十九日から文部省の斡旋と一高の好意によって一高生の寮であった明寮の一隅を借りて授業を再開することができました。

運動部の者達は、教室以外にもグラウンド・プール・テニスコートなど色々な面で一高の施設を利用して頂きました。更に、同年十一月二十四日一高教頭の峰尾都治先生が東高の第五代校長に就任されたことも両校の密接な関係を示しています。

東高の設立は、一九二二年十一月、勅令第四三二号により設立された日本で最初にして唯一の官立七年制高校であります。初代の湯原元一校長は七年制高校の主唱者であり、制度としてはドイツのギムナジウムを基本とし、校風はイギリスのイートン、ハローなどのパブリックスクールの様に、リベラルな中にも規律ある学校を目指していました。

この湯原校長の生徒を出来るだけ紳士として扱うリベラルなジェントルマンシップ教育の理念が、東高の、そしてその卒業生の特色の原点であろうと思います。

七年制(尋常科(中学)四年、高等科三年)

の中でも、普通中学に相当する尋常科の教育は一種の英才教育であり、高校受験がないことから受験科目に関係ない幅広い教養を身につける事が出来たと思われれます。後世ジャーナリズムの世界をリードした清水幾太郎、宮城音弥、糸川英夫等を輩出し、又音楽学校出身でないが世界的音楽指揮者朝比奈隆氏を生み出した源流と考えられます。又、学業のみでなく蹴球・水泳などのスポーツ面でも何度かインターハイ優勝を飾っています。

尋常科への入学者は殆どが東京出身者、高等科への入学者も殆どが東京、又は周辺の中学からで、しかも四年修了者が多く、この事が全国高校中でもトップクラスであった東大進学率にも反映していると思われれます。

又、文科、理科を問わず全ての学科に英語の甲類、ドイツ語の乙類に加えてフランス語の丙類のクラスを完備した唯一の高校でした。

この様に、いわばハイカラでアカデミックな教育環境下に育った東高生の特色として、よく口にされる言葉は、「スマート」「お坊ちゃん」だが「豪傑さに欠ける」という表現だろうと思います。

最後に一つ付け加えたいのが、東高節と東高踊です。東高生の苦心の合作の末に生まれたもので、一九二八年秩父宮台覧のもと

で行われた第二回記念祭で発表され、勇壮活発で且つしっかり振りがついている事から大好評を博し、NHKからも全国放送され、一九三二年にはドイツの映画会社により海外に紹介されました。機会があれば、駒場の皆様にもご披露したいと考えています。ともあれ、これから末長く駒場の皆様と付き合い出来ることを心から祈って居ります。

### ホームカミングデイ

平成十六年十一月十三日に大学が公式に主催するホームカミングデイが本郷と駒場



グドール博士講演会会場(900番教室)入口の様子

の両キャンパスで初めて開かれました。

駒場キャンパスでは数理科学研究科大講義室がメイン会場にあてられ、まず兵頭副研究科長の開会の挨拶でホームカミングデーは始まりました。本郷では安田講堂にメイン会場が設定され、NHKのアナウンサー黒田あゆみさん(教養学科国際関係論卒)の司会で催しは進行了しました。総長講演に続き管弦楽団等による演奏が行われた後、卒業生の加藤登紀子さん(文学部西洋史学科卒)によるコンサートが行われ、これらは総て駒場に同時中継されました。

それと並行して駒場キャンパスでは、奥田、関根、辻、四方の四氏による記念講演会「Glorious Ichiko〜遺産とその継承〜」(学



懇親会の様子  
(ファカルティハウス・セミナールームにて)

際交流ホール)とチンパンジー研究で世界的に知られるグドール博士による特別講演会「アフリカの森からのメッセージ」(九〇〇番教室)が開かれました。どちらの催しも盛況で、参加者にとって印象深いものでした。

また、各学科・分科が主催する卒業生の懇親会がキャンパス内各所で開催され、久しぶりに顔を合わせた卒業生が親睦を深めました。締め括りとしてファカルティハウスでレセプションが開催されました。挨拶や祝辞の後はおちこちで人の輪ができ、終始和やかな雰囲気の中に時間が過ぎ、八時過ぎに散会しました。

## 編集後記

会報の第二号をお届けします。駒場友の会創設以来事務局長として友の会の発展にご尽力下さいました大澤吉博先生が三月二十一日に急逝されました。享年五十六歳でした。大澤先生のあまりにも突然の死は関係者一同にとつて痛恨の極みです。故人のご冥福をお祈りすると同時にご遺族に対してお悔やみを申し上げます。

会報を手にとられた時にお気づきになられたかと思いますが、会報の題字が新しくなりました。一高同窓会の園部達郎さんに揮毫をお願い致しました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

今年度は会報を二回しか発行できませんでしたが、来年度は発行回数を増やし、内容も充実させてゆきたいと考えております。(高)

## ご来店をお待ちしております。

「駒場友の会」会員・会友のお食事には、コーヒーをサービスさせていただきます。(支払いカウンターにて会員証をご呈示いただいた方に限ります。)

駒場ファカルティハウス内  
ルヴェソンヴェール駒場

## 駒場友の会会報 第二号

平成十七年三月三十一日発行

発行人 瀧田 佳子

駒場友の会事務局

〒一五三―八九〇二 目黒区駒場三―八一―

東京大学駒場ファカルティハウス内

電話 〇三―三四六七―三五三六

メールアドレス

info-tomo@adm.c.u.tokyo.ac.jp

ホームページアドレス

http://www.komed.c.u.tokyo.ac.jp/lovekomaba/